出世

菊池寛

譲吉は、上野の山下で電車を捨てた。

二月の終りで、不忍の池の面を撫でてくる風は、まだ冷たかったが、薄暖い早春の日の光を浴びている楓や桜の大樹の梢は、もうほんのりと赤みがかっているように思われた。

ずいぶん図書館へも来なかったなと、譲吉は思った。図書館でゆっくりと半日を暮し得るほどの暇もなかった過去一、二年の生活が、今さらのように振りかえられた。それと同時に、そうした繁劇な生活からやっと逃れることができて、暢気（のんき）に図書館へでも来られるようになった現在の境遇を喜ばずにはおられなかった。

もう一、二年も来なかったかも知れない。いや職業を得てからは、一度も来なかったかも知れないと、彼は思った。兎の耳のように、ひっそいだように突っ立っている白い建物、安定を保っているようで、そのくせ今にも落ちかかりそうに思われるあの白煉瓦の建物にも、長い間足踏みもしないないなと思った。

図書館のことを考え出すと、彼はその中で過したいろいろな時代の自分の姿が、ひっきりなしに頭の中に浮んできた。彼が、初めて東京へ出てきてから、六、七年間の、暗いみじめな学生生活のどの時代のことを考えても、あの図書館の中で暮した半日なり一日なり

の有様が、はっきりと頭のうちに、浮んでこないことはない。

彼が田舎の中学を出て、初めて東京へ来た時、最初に入った公共の建物は、やっぱりあの図書館であった。本好きの彼にとっては、場所にも人にも、何の馴染みもない東京の中では、図書館がいちばん勝手が分かるようであった。

田舎の中学生にありがちな、東京崇拝に原因しているいろいろな幻影が、東京における実際の建物、文物、風景、人物に接して、ことごとく崩れていってしまった中でも、図書館に対する満足だけは、いつまでも残っ

ていた。田舎の設備の不十分な蔵書の少ない図書館だけしか知らなかった譲吉の目には、あの図書館がどんなに広大に完成されて見えただろう。その頃の彼には、東京におけるいろいろな設備の中では、図書館のありがたさだけがいちばん身に染みて感ぜられた。

その時以来、どんなにあの図書館の世話になったことだろう。最初入学した専門学校を退学されて、行きどころもなくぶらぶらぶらと半年ばかりの月日を過さなければならなかった時には、どんなにあの建物のありがたさが分かっただろう。

高等学校へ入ってからも、幾度通ったかもわからな

い。まだ、そればかりではない、つい二年前、大学を出てから職業にありつくまでの半年間を、彼はやっぱり図書館で暮していたのだ。その時代の図書館通いは、彼にとってはいちばんみじめなことであった。

大学を出ても、まだ他人の家の厄介になっていて、何らの職業も、見つからないのに、彼の故郷からは、もう早くから、金を送るようにいってきていた。大学を出さえすれば、すぐにも金が取れるように彼の父や母は思っていた。またそう思わずには、おられなかったのだろう。「譲吉が学校を出るまで」という言葉を、彼らは窮乏から来る苦しみを逃れる、唯一のまじない

のように思っていたのだから。譲吉は、自分が就職難に苦しんでいる最中に、早くも金を送れといってくる母の無理解さに、いらいらしながら、自分が学問をしたそのために、家に負わした経済的な致命傷のことを思うと、そうした性急な催促も、もっともと思わずにはおられなかった。

それだけで仕方なしに、彼はどうにかして、金を儲けることを考えた。そうして、こんな場合に、多少文筆の素養があるものが考えつくように、翻訳をやってみようと思った。彼は、友人の紹介で、ある書店から出版されている「西洋美術叢書」の一巻を翻訳させて

もらうことにした。それは、ガードナーという人の書いた「希臘（ギリシャ）彫刻手記」という本であった。金色（こんじき）の唐草模様か何かの表紙の付いた六、七百ページの本であった。またその活字が、邦字の六号活字に匹敵するほどの小さいローマ字で、その上ベッタリと一面に組んであるのであった。一ページを訳するのにも、一時間近くもかかった。その六、七百ページを、ことごとく訳し終って、所定の稿料を貰える日は、茫漠としていつのことだか分からなかった。それでも彼は、勇敢にその仕事を続けていった。その仕事をするほかには、金の取れる当ては、少しもなかったから、彼は毎日のよ

うに、厄介になってる家からは比較的に近い、日比谷の図書館へ行って、翻訳を続けてやった。

その翻訳が、やっと六、七十枚ぐらいでき上った頃だろう。ある日のこと、彼は例の「希臘彫刻手記」と原稿紙と弁当とを、一緒に包んだ風呂敷を提げて、日比谷の図書館へ行ったが、図書館へ行って、仕事に取りかかる前の一休みにと、その日の新聞を読んでいたときに、ふと自分が提げてきたはずの風呂敷包が無いのに気がついた。彼は、おどろいて身のまわりを探し回った。が、彼の座席にも新聞閲覧室のどこにも見当らなかった。よく気を落着けて考えてみると、電車か

ら降りるときに、もうあの包を持っていなかったのに気がついた。電車に乗る時に買った新聞を読む時に風呂敷包が邪魔になったので、自分の背と車台の羽目板の間に置いたことに気がついた。内幸町であわてて降りた時に、すっかり忘れてしまったのだと思った。

　彼は、その場合にそれほど大切な品物をぼんやり忘れてしまう自分の腑甲斐（ふがい）なさがしみじみと情なかった。そんなに、ぼんやりとしていて大切な品物を容易に忘れてしまうようでは、俺は激しい世の中に立っては、とても存在していかれない人間ではあるまいかとさえ思われた。

彼は茫然とした淋しい情ない心持で、まず三田の車庫へ行ってみた。が、そこにいた監督は「巣鴨の電車ならば、春日町の車庫か、巣鴨の車庫かへ、車掌が届けているでしょう。そんな風呂敷包なら誰も持って行かないでしょう」といった。

彼は、監督の言葉で、やっと安心して、すぐ引っ返して春日町へ行った。三田から春日町までの、あの長い丁場を、彼はどんなにいらいらした心持で乗ったことだろう。が、春日町へ着いてみると「希臘彫刻手記」は、そこへも来ていなかった。

「ああきっと、本郷回りの電車でしょう。それだと、

巣鴨の車庫へ届けたのでしょう」と、そこの監督が、彼の希望を繫いでくれた。が、巣鴨まで行ってみると、そこにもやっぱり「希臘彫刻手記」は来ていなかった。「見つけた車掌が持ってきたんでしょうが、出発を急いだので、ここへは届けずにまた持って行ったんでしょう。それだと、もう一度三田の車庫へ行ってみたらどうです」と、そこの監督が、また彼の消えかかった希望を繫いでくれた。彼は、また巣鴨から三田までの長い線路を——東京のほとんど端から端を、頼りない不快で乗った。が、三田の車庫にもやっぱり彼の風呂敷包は見出されなかった。

「電気局へ明日あたり行ってごらんなさい。電車内へ遺失したものは、一度は必ずあちらへ集まりますから」と前（ぜん）のと違った車掌が、また彼に一縷の望みを伝えてくれた。

誰かに持って行かれたのだという疑いが、だんだん明らかな形を取り出した。そう思うと、自分の横に座っていた印半纏（しるしばんてん）の男が浚（さら）って行ったのかも知れないと思った。が、あの男が家へ帰って「希臘彫刻手記」と原稿紙と弁当とを見出（いだ）して、一体それを何にするであろうかと思った。俺に、こんなに迷惑をかけながら、向うでは少しも得をしない、罪悪の中でもこうした罪

悪が、結果的にはいちばん性質の悪いやつかも知れないと、譲吉は思った。

本屋から貸してくれた原本を無くしたこと、それは少しの義理を欠けば済むことだが、自分の金儲けの希望を、それほど些細に、手軽にふいにしてしまったことが、彼には堪らなく不快であった。が、まだまるきり失望するには当らない。明日電気局へ行けば、都合よく届け出されてあるかも知れないと思った。

が、翌日電気局へ行ってみたが、やっぱり無かった。念のために、警視庁の拾得係へ行ってみたが、やっぱり無かった。もう盗られたのに違いなかった。困って

いる俺にとっては、あんなに大切のものを、ほんの出来心に盗るやつがあるかと思うと、譲吉は何となく腹立たしかった。

が、丸善にでもあれば、そう失望するには当らない。五円か六円かの金を、どうにか都合して買えばいいのだと思った。彼は、そう思いつくと、その足で丸善へ行ってみたが、やっぱり徒労であった。

「その本なら、去年あたり二、三部来ましたが、とっくに売り切れてしまいました。御注文なら、取り寄せます」と、いったが、その頃は戦争の影響で、英国から本を取り寄せるには、少なくとも三、四カ月、長け

れば半年もの時間がかかった。そうした余裕がこの場合にあるわけはなかった。

彼は丸善を出てから、また新しい希望を見出した。

「ああもしかしたら、古本屋にあるかも知れない」

彼は、すぐ神田へ行った。そして、多くの古本屋をほとんど軒並に探してみた。が、あの金色(こんじき)の唐草模様はどこにも見出されなかった。本郷も同じことだった。

彼は、足と目とをさんざんに疲らせて、その日の捜索をあきらめて、三田行の電車に乗った。また彼の頭には新しい希望が湧いた。

「ああ図書館にあるかも知れない」

こんなに考えつきやすいことを、今まで考えつかなかった自分の迂遠さが、少しばからしくなった。彼は電車が内幸町へ来ると、急いで飛び降りて、日比谷の図書館へ行ってみた。が、そこのカタログには、幾度繰り直しても、見出されなかった。

「ああ上野、あそこが唯一のしかも最後の希望だ」彼はもう日が暮れかかっていたにもかかわらず、後へ引っ返した。あの鉄の三層の階段を、どんなに急いで駆け上ったか、そして、どんなにときめく心と険しい目付とをもって Fine Arts —— Sculpture の項を、探ったことだろう。そこで、運よく本当に運よく

という字を見出した時に、譲吉の心はどんなに嬉しかっただろう。

「ああ、やっと救われたな」と、思った。

彼は、その翌日から毎日のように、上野の図書館へ通った。が、その仕事がどんなに退屈で不便であっただろう。自分が本を持っていた時には、朝起きた時のしばらくとか、床に就く前の二、三時間などに執る筆が、どんなに仕事を進捗せしめたことだろう。が、仕事の場所が制限され、従って時間が制限されることによって仕事は少しもはかどらなかった。と、同時に仕

事そのものが、いよいよ苦しくなっていった。

が、彼は根よく二、三カ月、毎日、その仕事をつづけていった。彼は、唯一の金儲けの方法として、その仕事を続けていった。その後、その書肆（しょし）が破産したために、本当は一文にもならなかった仕事を、一生懸命に熱心に続けていったのだった。

彼は、大仏の前を動物園の方へと、道を取りながら、そんなことを取りとめもなく考えていた。その頃のみじめな自分のことを考えると、現在の自分の境遇が別人のように幸福に思われた。月々貰っていた五円の小遣いから、毎日の電車賃と、閲覧券の費用とを引いた

残りで、時々食っていた図書館の中の売店の六銭のカツレツや三銭のさつま汁のことまで、頭の中に浮んだ。あの慎ましかった自分の心持を思うと、その頃の自分が、いとしく思わずにはおられなかった。

昼でも蝙蝠（こうもり）が出そうな暗い食堂や、取りつく島もないように、冷淡に真面目に見える閲覧室の構造や、司書係たちのセピア色の事務服などが頭に浮んだ。その人たちの顔も、たいていは空（そら）で思い浮べることがあった。

「ああそうそう、あの下足番もいるなあ」と思った。

あの下足番の爺（おやじ）、あいつのことは、時々思い出して

おった、と思った。それは、譲吉が高等学校にいた頃から、あの暗い地下室に頑張っている爺だった。

上野の図書館へ行ったものが誰も知っているように、正面入口に面して、右へ階段を下りると、そこに乾燥床（ドライエリア）があって、そこから地下室の下足に、入るようになっている。その入口には昼でもガスが灯っている。そのガスの灯を潜るようにして入ると、そこに薄暗いしかも広闊な下足があった。譲吉はそこに働いている二人の下足番を知っていた。ことに譲吉の頭にはっきりと残っているのは、大男の方であった。六尺に近い大男で、眉毛の太い一癖あるような面構えであったが、

もう六十に手が届いていたろう。もう一人の方は、頭のてかてか禿げた小男であった。

二人は恐ろしく無口であった。下足を預ける閲覧者に対しても、ほとんど口を利かなかった。職務の上でもほとんど口を利かなかった。劇場や、寄席、公会場の下足番などが客の脱ぎ放した下駄を、取り上げて預かるようになっているのと違って、ここでは閲覧者自身に下駄を取り上げさせた。またそうしなければならぬような設備になっていた。もし初めての入館者などが下駄を脱いだままぼんやりと立っている場合などに、この大男の爺は、顎でその脱いだ下駄を指し示した。

二人はいかなる場合にも、たいていは口を利かなかった。二人の間でも、ほとんど言葉を交わさなかった。深い海の底にいる魚が、だんだんその視力を無くすように、こうした暗い地下室に、この、人の下駄をいじるという賤役に長い間従っているために、いつの間にか嫌人的（ミザンスロピック）になり、口を利くのが嫌になっているようであった。

二人はまた極端に利己的であるように、譲吉には思われた。二人は、入場者を一人隔（お）きに引き受けているようであった。従って、大男の順番に当っている時に、入場者が小男の方に下駄を差し出すと、彼はそしらぬ

顔をして、大男の方を顎で指し示した。小男の順番に当っている時、大男の方へ下駄を差し出した場合も、やっぱりそうであった。彼らは、下足の仕事を正確に二等分して、各自の配分のほかは、少しでも他人（ひと）の仕事をすることを拒んだ。入場者の場合は、それでもあまり大した不都合も起らなかったが、退場者の場合に、大男の受札の者が、五、六人もどやどやと続けて出て、大男が目の回るように立ち回っている時などでも、小男は澄まし返っていて、小さい火鉢にしがみつくようにして、悠然と腰を下していた。が、大男の方も、小男の手伝いをせぬことを、当然として恨みがましい顔

もしなかった。

譲吉は、その頃よく彼らの生活を考えてみた。同じ下足番であっても、劇場の下足番や寄席の下足番とは違って、華やかなところが少しもなかった。その上に彼等の社会上の位置を具体化したように、いつも暗い地下室で仕事をしている。下足番という職業が持っている本来の屈辱の上に、まだ暗い地下室で一日中蠢(うごめ)いている。勤務時間がどういう風であったかは知らないが、譲吉が夜遅く帰る時でも、やっぱり同じく彼らが残っていたように思う。来る年も来る年も、来る月も来る月も、毎日毎日、他人(ひと)の下駄をいじるという、

単調な生活を繰り返していったならば、どんな人間でもあの二人の爺のように、意地悪に無口に利己的になるのは当然なことだと思った。いつまであんな仕事をしているのだろう。恐らく死ぬまで続くに違いない。おそらく彼らが死んでも、入場者の二、三人が、「この頃あの下足番の顔が見えないな」と、軽く訝しげに思うにとどまるだろう。先の短い年でありながら、残り少ない月日を、一日一日ああした土の牢で暮さねばならぬ彼らに、譲吉は心から同情した。

図書館の下足の爺何時までか
下駄をいじりて世を終るらん

これは、譲吉がいつだったか、ノートの端にかきつけた歌だった。もとより拙かった。が、自分の心持、下足番の爺に対するあの同情的な心持だけは、出ているように思っていた。

あの爺も相変らずいるに違いないと思った。まだ俺の顔も、見忘れてはいまいと思った。高等学校時代に絶えず通っていた上に、譲吉は彼らと一度いさかいをしたことがあった。それは、何でも高等学校の二年の時だったろう。

彼は、その日何でも非常に汚い尻切れの草履をはい

ていた。その頃、彼は下駄などはほとんど買ったことがなく、たいていは同室者の下駄をはき回っていたのだったが、その日は日曜か何かで、皆が外出したので、はくべき下駄がなかったのであろう。彼が、いつもの通り、その汚い草履を手に取って、大男の方へ差し出すと、彼はそれを受け取ってすぐ自分の足元に置いたまま、しばらく待っても下足札をくれようとしなかった。

「どうしたんだ？　札をくれないか」と、譲吉は少しむっとしたので、荒っぽくいった。

「いや分かっています」と、大男はいかにも飲み込ん

だように、首を下げて見せた。
「君の方で分かっていようがいまいが、札をくれるのが規則だろう」
「いや間違えやしません。あなたの顔は知っています」
「知っていようがいまいが問題じゃない。札をくれたまえ。規則だろう」
「いくら規則でも、あんまりひどい草履ですね」と、彼は煙管を、火鉢の縁にやけに叩いた。
「人をばかにするな。何だと思うんだ。いくら汚くても履物は履物だぜ」譲吉は本当に憤慨していった。

「あなたの帽子が、どこの学校の帽子かぐらいは知っている。が、何も札をあげなくたって、間違わないというんだから、いいでしょう」と、爺はまだ頑強に抗弁した。譲吉は、自分の方に、十二分の理由があるのを信じたが、大男の足のすぐそばに置かれている自分の草履を見ると、どうもその理由を正当に主張する勇気までが砕けがちであった。下足に供えてある上草履のどれよりも、貧弱だった。先方から借りる上草履よりも、わるい草履を預けながら、下足札を要求する権利は、本当からいえば存在しないものかも知れなかった。

その時の喧嘩の結末が、どう着いたか、譲吉はもう忘れている。自分の方が勝って下足札を貰ったようにも思うし、自分の方が負けてとうとう下足札を貰えなかったようにも思える。

が、とにかくあのこと以来、あの大男の爺は自分の顔を、はっきりと覚えているに違いないと彼は思った。むろん、譲吉はそうした喧嘩をしたために、あの男に対する同情を、少しも無くしはしなかった。ああした暗い生き甲斐のない生活をあわれむ心は、少しも変っていなかった。

彼がどんなに窮迫しているときでも、図書館へ行っ

て、彼らが昔ながらにあの暗い地下室で蠢いているのを見ると、俺の生活がこの先どんなに逼迫しても、あすこまで行くのにはまだ間があるというような、妙な慰めを感ずると同時に、生涯日の目も見ずに、あの地下室で一生を送らねばならぬ彼らを、悼ましく思わずにはおられなかった。

あの二人は、やっぱりいるに違いない。火鉢にぶっりともいわずに、くすんだ顔をして向い合っているに違いない。あの生活から脱却する機会は死ぬまで彼らには来ないのだと譲吉は思った。あの図書館へ来る幾

百幾千という青年が、多少の落伍者はあるとして、それぞれ目的を達して、世の中へ打って出るにもかかわらず、あの爺は永久に下足番をしている。あの暗い地下室から、永久に這い出されずにいる。そう思うと、譲吉は自分の心がだんだん暗くなっていった。二年前までは、ニコニコ絣を着て、穴のあいたセルの袴を着け、ニッケルの弁当箱を包んで毎日のように通っていた自分が、今では高貴織の揃いか何かを着て、この頃新調したラクダの外套を着て、金縁の眼鏡をかけて、一個の紳士といったようなものになって下足を預ける。自分の顔を知っているかも知れないあの大男は、一体

どんな気持ちで自分の下駄を預かるだろう。あの尻切れ草履を預けて、下足札を貰えなかった自分と、今の自分とは夢のようにかけはなれている。あの草履の代りに、柾目の正しく通った下駄を預けることができるが、預ける人はやっぱり同じ大男の爺だ。そう思うと、譲吉はあの男に、心からすまないように思われた。どうか、自分を忘れてしまってくれ、自分がすまなく思っているような気持が、先方の胸に起らないでくれと譲吉は願った。

そんなことを思いながら、いつの間にか、美術学校に添うて、図書館の白い建物の前に来た。左手に婦人

閲覧室のできているのが目新しいだけで、門の石柱も玄関の様子も、閲覧券売場の様子も少しも変っていなかった。彼は閲覧券売場の窓口に近づいて、十銭札を出しながら、

「特別一枚！」と、いった。すると、思いがけなく、

「やあ、長い間、来ませんでしたね」と、中から挨拶した。譲吉はおどろいて、相手を凝視した。それはまぎれもなくあの爺だった。

「ああ、君か！」と、譲吉は少しあわてて頓狂な声を出した。向うはその太い眉をちょっと微笑するような形に動かしたが、何もいわずに青い切符と、五銭白銅

とを出した。

譲吉は、何ともいえない嬉しい心持がしながら、下足の方へと下った。死ぬまで、下足をいじっていなければならないと思ったあの男が、立派に出世している。それは、判任官が高等官になり勅任官になるよりも、もっと仕甲斐（しがい）のある出世かも知れなかった。獣か何かのように、年百年中薄闇に蠢いているのとは違って、蒲団の上に座り込んで、小奇麗な切符を扱っていればいい。月給の昇額はほんのわずかでも、あの男にとっては、どれほど嬉しいか分からない。あんなに無愛想であった男が、向うから声をかけたことを考えても、

あの境遇に十分満足しているに違いないと思った。人生のどんな隅にも、どんなつまらなそうな境遇にも、やっぱり望みはあるのだ。そう思うと、譲吉は世の中というものが、今まで考えていたほど暗い陰惨なところではないように思われた。彼はいつもよりも、晴々とした心持になっている自分を見出した。

が、それにしても、もう一人の禿頭の小男はどうしたろうと思って注意して見ると、その男もやっぱり下足にはいなかった。むろん、図書館の中でなくてもいいが、あの男も世の中のどこかで、あの男相当の出世

をしていてくれればいいと譲吉は思った。

底本：「菊池寛　短編と戯曲」文芸春秋
　　１９８８（昭和63）年３月25日第１刷発行
入力：真先芳秋
校正：鈴木伸吾
１９９９年３月８日公開
２００５年10月11日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。